

第一朗読：サムエル記（サムエル下 5・1－3）；長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした

答唱詩編：（詩編 122・1+2、3+4ab、4cd+5）；わたしたちは神の民、その牧場の群れ。

第二朗読：使徒パウロのコロサイの教会への手紙（コロサイ 1・12－20）；御父は、わたしたちを愛する御子の支配下に移してくださった

アレルヤ唱：（マルコ 11・9b+10a）；主の名によって、来られるかたに賛美。わたしたちの父、ダビドの国に祝福がありますように。

福音朗読：ルカによる福音（ルカ 23・35－43）；イエスよ、あなたの御国においてになるとときには、わたしを思い出してください

年間の最後の主日にあたる今日、わたしたちは「王であるキリスト」を祝います。「王」と言われてもピンと来ないかもしれません。覇権争いの中で「王」という者が現れては消えていきました。権力をもってその地を統治する者が地上の王であるとする、イエスはどういう意味で王なのかということが疑問となります。

ルカ福音書では一緒に十字架につけられた犯罪人たちのうちの一人が「イエスよ、あなたの御国においてになるとときには、わたしを思い出してください」と言っています。ほかの 3 つの福音書でも二人の強盗たちが一緒に十字架につけられますが、マタイとマルコはどちらの犯罪人もイエスをののしったとあります。ところが、ルカにおいては回心する犯罪人を登場させるところに、苦しむ救い主とすべての人々に対する神のあわれみを記しているルカの特徴が表れています。

この犯罪人は自分もイエスもこの十字架上で死ぬことはわかっています。この世での命が終わることが分かっています。そして、「あなたの御国においてになるとときには」と言っていることからイエスの王国が死を越えて実現するということを信じていると考えられます。そこで「わたしを思い出してください」と願っています。これはわたしたちの信仰の中心ではないでしょうか。この犯罪人の姿こそがわたしたちキリストを信じる者の姿なのだと思います。わたしたちはみな、それぞれ自分の十字架を背負って生きています。その中でもがき苦しんで生きています。人生の最後に至るまで「イエスよ、共にいてください」と願うことが大切なことなのだと、今日の福音は教えているのです。

イエスの返事ははっきりしています。「はっきり言うておく」という言葉をよく目にしますが、これは「この世の人々はこうであると言っているが、わたしは違うとはっきり言うておく」ということです。みんなはそうは思わないだろうがわたしは次のようにはっきり言うということです。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」とイエスは断言されました。楽園とは、神と人と共に暮らすところであり、人と人とが調和に満ちた世界だと言ってもいいでしょう。

創世記 2 章に描かれるエデンの園がまさしく楽園です。エデンの園に神がアダムを連れてきてそこに住まわせ、そこを耕し守るようにされました。そして女であるエバと一緒に住まわせました。神と人々が一緒に暮らすところが楽園というわけです。しかもそこにいるのが「今日」なのです。「今日あなたはこの世の生を終えるが、すぐにわたしとともに楽園にいる」ということをイエスは言っているのです。素晴らしい励ましの言葉です。わたしたちの祈りがどうあればいいのかが、ここに示されていると思います。「イエスよ、あなたの御国においてになるとときには、わたしを思い出してください。」

イエスに願い求めると同時にわたしたちがしなければならないことがあります。それはその前の言葉です。もう一人の犯罪人が議員たちや兵士たちと同じ言葉を放った後です。「メシアなら自分自身と我々を救ってみろ。」この言葉に対して、「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない」ともう一人の犯罪人は弁護しました。わたしたちキリスト者が神にゆるしを願うと同時に、神への信仰を証しすることが求められるということを表しています。

王であるキリストとは、「自分を犠牲にして人々を救い、あわれみをもってゆるしを与えてくださる方」なのだ、ということを表しています。自分を守るために君臨している地上の王とはまったく違うのです。この回心した犯罪人のようにイエスを証しし、イエスが共にいてくださるように願いながら、王であるキリストをたたえてこの祭儀を続けてまいりましょう。